

彭際清『華嚴念仏三昧論』について(二)

中 村 薫

周知の如く、彭際清は、乾隆五年(一七四〇)に長州に生まれ、嘉慶元年(一七九六)、五十六歳で還帰するまで、楊文会(一八三七―一九一一)と共に清代末の居士仏教の代表者の一人であった。既説した如く、彼の生涯に於ける著作は三十五歳から始まり、五十二歳で終るまでの十七年間に集中しており、凡そ十五篇の著書を残っている。

今回、考究せんとする『華嚴念仏三昧論』(以下『論』と略)は、乾隆四十八年(一七八三年十二月)に制作し、乾隆五十六年(一七九一年六月)に再録したものである。彼の制作↓再録の間に於ける思想的変遷についても既説した通りであるが、今、この『論』の構成を見てみると、先ず、念仏の法門を「多仏普念・一仏専念」の二途に分けている。続いて五義の門により「華嚴念仏三昧」の意義について述べ、最後に五つの問答を設けて群疑を詳破して一乗に帰すことを述べる訳である。以下、順次具体的に五門の内容の加討を加えていくこととする。

一 念仏法身直指衆生自性門

この門は、念仏の法身が決して衆生の自性とかけ離れたものでないことを明かさんとする門である。彭際清は、

「吾人固有之性。湛寂光明。徧周塵刹。諸仏別無所証。全証衆生自性耳。」

と、諸仏の所証と衆生の自証を証することと同義であるとしている。彼はその教証として、「如来出現品」の

「菩薩摩訶薩。応レ知。自心念念。常有レ仏成ニ正覺。何以故。諸仏如来。不離ニ此心ニ成ニ正覺ニ故。如ニ自心。一切衆生心。亦復如是。悉有ニ如来ニ成ニ等正覺。广大周遍。無ニ処不レ有。不離不斷。無レ有ニ休息。」(T 10・275・b)

の文を引用している。この部分は、『経』では出現の菩提を明かす十門の中、第十一「菩提は諸心に普遍なること」を明かしている箇処である。そして、続いて、

「無一衆生而不ニ具有ニ如来智慧。但以ニ妄想顛倒執著。而不ニ証得。」

若離^三妄想。一切智自然智無礙智則得^二現前^一。(T 10・27・c)

の文を引用している。こども、如来出現の意義について十喩を以て如来の十種の大智を顕わしている中、第十「塵含経巻喩」を以て仏の性通の平等の智に喩えている箇所である。

以上、二箇所の引用文を以て、如来の法身について述べるのである。そして、更に、今度は如来出現の境界について説かれてゐる

「諸菩薩摩訶薩。不^レ応於^二法。一事一身。一国土一衆生。見^レ於如来。応遍^二一切處。見^レ於如来。仏子。譬如^レ虚空遍至^二一切。色非色處。非^レ至非^レ不至。……」(T 10・266・a)

の箇所を引用し、如来の身業は、一法一事一身一国土一衆生等の一切所に周遍して顕現するものであると述べ、最後に彭際清自ずから

「以^二自心智慧^一本無^二障礙^一故。無^二障礙^一智慧即如来境界故。此名^二念自性仏^一。亦名^二自性念仏^一。自性念仏者無^レ仏外之念^二能念于仏^一。念自性仏者無^レ念外之仏^二為^二自所念^一。」

と、念自性仏と自性念仏とを明確に区別するのである。つまり、念自性仏とは、念ずることのない仏はないのであって、仏は仏自身、仏々相念として互に念じ合うというのである。

また、自性念仏とは、如来の法身と同体の衆生の自性は仏以外を念ずることはなく、ただひたすら仏そのものを念ずるというのである。ここに仏と仏、仏と衆生、衆生と衆生とが相

互に感応道交し合う如来の境界が現出するのである。

結局、この門に入らなければ、法身の自性を識ることがなく、従つて、念ぜられる仏も究竟位に入らないというのがこの第一門である。

二 念仏功德出生諸仏報化門

この門は、念仏の功德は諸仏の報化に出生することを得ることを明かさんとする門である。彭際清は

「一切如来称^二法界量^一。現^二種種身^一。示^二無尽莊嚴^一。作^二無辺仏事^一。一以^二普光明智^一而為^二其体^一。」

と、如来のはたらきが、十方国土に随順し、虎空界に齊一なることを述べ、続いて、初会の普賢の三昧の一品が正しく仏の華嚴全体を顕わし、その普賢も、一切諸仏の毘盧舍那藏身三昧に入ること明かすのである。斯かる三昧は『華嚴経』全体に貫徹しているのであるが、特に「入法界品」に於ける、徳雲比丘・解脱長者・安住長者の三善知識は、俱に念仏の一門を以て解脱を得るとしている。

今、その三善知識の念仏義を説示してみると、先ず、徳雲比丘は

「我得^二自在決定解力^一。信眼清淨。智光照曜。普觀^二境界^一。離^二一切障^一。善巧觀察。普眼明徹。具^二清淨行^一。往^二詣十方一切国土^一。恭敬^二供養一切諸仏^一。常念^二一切諸仏如来^一。總^二持一切諸仏正法^一。常

見一切十方諸仏。」(T 10・334・b)

と説く。彭際清は「我得自在決定解力」以下は「念法身仏」を明かし、「往詣十方」以下は「念報化仏」を明かすものであると二分し、法身に随順して報化を起し、法身も所感報化も俱に別なく無量となるのである。故に徳雲比丘の説く二十一種の念仏三昧は、三身を具足した一念相應なるものであり、従つて、一切の諸々の三昧を徧攝するものでなくてはならないことになる。また、解脱長者は

「知一切仏及与我心。悉皆如夢。知一切仏猶如影像。自心如夢。知一切仏所有色相。及以自心。悉皆如幻。知一切仏及以自心。悉皆如響。我如是知。如是憶念。所見諸仏。皆由自心。」(T 10・339・c ~ 340・a)

と説く。一切の仏と我心は全く夢幻の如きもので皆自心そのものによつて起きるものであるという。彭際清は

「所謂無礙莊嚴解脱者。離一切相。成一切相。雖然如夢如幻而亦不壞夢幻諸境。若不入此夢幻法門者。便如舍利弗大目犍連等在三逝多林。不見如来神力境界。」

と、如来無礙莊嚴解脱門は、夢幻法門に入ることであり、もし、この夢幻法門に入らなければ、仏の十大弟子中、仏の入滅以前に還歸している舍利弗・目連のように、逝多林に在つて如来の神力の境界を見ることができなかったと同じであるという。次に安住長者は

「我開栴檀座如来塔門時。得三昧。名三無種無尽。善男子。我念念中。入三三昧。念念得知一切無量殊勝之事。」(T 10・336・b)と説く。仏種無尽なる三昧に入り、迦葉仏・拘那含牟尼仏などの名を持つ微塵数の仏を見ることを得るという。彭際清は「此仏種無尽。皆由普賢願行所生。蓋普賢願行。俱以四無尽句而得成就。」

と、仏種無尽の三昧も徧に普賢の願行である四無尽句によるというのである。

結局、この門は、仏の功徳を念ずる所以について、無量の報身・報土・及び化身・化土を念ずることを明かすというのである。

三 念仏名字成就最勝方便門

この門は、念仏の名字により、最勝の方便を成就すること

を明かさんとする門である。彭際清は自ずから「夫法身無朕。仮于名而法身顯矣。報化無辺。緣于名而報化該矣。」

と述べている。名の尊いこと、そして、如何に衆生にとつて、また、仏にとつても名号が大事な意味内容を持っているかを「須弥偈讚品」、「文殊般若經」などにより明らかにせんとするのである。

先ず、「須弥偈讚品」には

「寧受_二地獄苦_一」得_レ聞_二諸仏名_一。不_レ受_二無量樂_一。而不_レ聞_二仏名_一。所以於_二往昔_一。無數劫受_レ苦。流_レ転生死中。不_レ聞_二仏名_一故」(T 10・83・a)

とある。こゝは十菩薩の偈讃の十段の中、第八番目の真実慧菩薩の偈文である。今、その内容を鑑みると、諸仏の名を聞かなければ、無数劫の間生死の中に流転し続け、また苦を受け続けていかなければならない。もし、衆生が苦から解脱し、無量の樂を受けんと願うならば、ただひたすらに仏名を聞き続けていくのみであると説くのである。

そして、『文殊般若經』には

「欲_レ入_二一行三昧_一。應_レ處_二空閑捨_二諸亂意_一。不_レ取_二相貌繫_二心一仏_一專稱_二名字_一。隨_二仏方所_一端_二身正向_一。能於_二一仏念念相續_一。即是念中能_レ見_二過去未來現在諸仏_一」(T 8・731・b)

とある。これは一行三昧に入るためには、心に一仏を繫留し、専ら諸仏の名字を称すべきであると説くのである。

ところで、仏名を念じるといっても、衆生にとって、その仏名の内容が明確にならなければ念じることができない筈である。そこで彭際清は、仏名の数と無量ということに著目して次の二文を引用するのである。

「兜率偈讚品」の

「以_レ仏爲_二境界_一。專念而不_レ息。此人得_レ見_二仏其數_一与_レ心等」(T 10・123・b)

彭際清『華嚴念仏三昧論』について(一)(中 村)

の偈文と、「賢首品」の

「若能念仏心不_レ動。則常觀_二見無量_一仏。若常觀_二見無量_一仏。則見_二如來体常住_一」(T 10・73・a)

の偈文とがそれである。(◎印筆者)

彭際清はこの二文について

「前偈論持名。故言_二數_一。後兼_二報化_一以_レ徹法身。故言_二無量_一。」と解釈を加えている。つまり、持名に対して數、法身に対して無量という具合に区別するというのである。そして、この數と無量との關係については、有量の數と離量の數という表現で以て説明を加え、就中、一仏を念ずることは一切の仏を徧攝することであるというのである。故に仏の名が無量に説かれるということは飽くまでも仏徳の無量なることを顯わさるゝがためである。何故かといえば、それがもし單なる無量ということだけに終止してしまつたならば、衆生にとって抽象的なものとしてしか受けとれないものになってしまうからである。従つて、その無量はどこまでも唯一無量なる仏名を意味するものでなければならぬことになる。

如上、更に彭際清自身、『阿弥陀經』で説かれる「執持名号」、「如來名号品」で説かれる「一如來名号。与_二法界虚空界_一等」などにより、

「持_二一仏名_一。全收_二法界_一。全法界名。全法界收。非_二過去_一。非_二現在_一。非_二未來_一。亦非_二南西北方四羅上下_一。十方三世。当_レ念無_レ余。

不_レ歴_三刹那_一。成_三仏已竟_一。」
と結論づけている。

以上、この門は、諸仏の名字を念ずることそれ自体が既に最勝の方便であることを明かしているのである。

四 念毘盧遮那仏頓入華嚴法界門

この門では、毘盧舍那仏を念ずることそれ自体が、そのまま『華嚴經』の始終が念仏を離れてはあり得ないということ
を明かさんとするのである。彭際清は、先ず「世住妙嚴品」の
文を取意して

「十方諸大菩薩及天龍神鬼所說諸頌。各出_三自証法門_一。以_三如來果
地_一。發_三入信解_一。令_レ入_三念仏三昧_一。自是說。」（T10・1・b）

と、諸善万行すべて各々自証法門より出することに違いはないが、それは結局念仏三昧に入らしめるためであるというのである。つまり、十信・十住・十行・十廻向の菩薩の階位の修習に於いて、就中、「十地品」では、一地を歷る毎に「不離念仏念法念僧」（T・10・183・c）といている。これによって、菩薩道全体もただ念仏を以て本行としていることが明らかである。そして、更に普賢の十大願中、第八願である常隨
仏学の一門の

「如_三此娑婆世界_一。毘盧遮那如來。從_三初發心_一。精進不退。以_三不可說不可說_一身命而為_三布施_一。」（T10・845・b）

の文により、仏と仏道とは不同であり、仏陀釈尊の因地の修行も如來の果地と何ら異なることはないという。即ち、本師と初發心時等に異なるのないことを強調するのである。

いうまでもなく、『華嚴經』の特徴は、『大方廣仏華嚴經』の経題が示すが如く、仏の自内証そのものを単に方便を用いることなく開現せんとしている点にある。今、体と用とで示せば、その体は大方廣仏の法であり、用は華嚴の菩薩道となり、そこに体により用を顯わすべき仏そのものの相が現われるのであり、その仏が外でもない毘盧舍那仏である。故に『華嚴經』で説示される仏といえは、諸仏の中で特に毘盧舍那仏が主となることに変わりはない。しかるに、彭際清は「是知_三諸仏法界_一。徧攝徧融。弥陀全体_三遮那極樂_一。不_レ離_三華藏_一隨衆生心_一。見_三各不同_一。而仏本來常不動故。故末卷即以_三回向極樂_一終_レ之。具如_三後文所説_一。」と述べている。

結局、この門は、阿弥陀仏と毘盧舍那仏とが同体であり、極樂世界も蓮華藏世界と離れたものではなく、共に衆生心に随うという点で不同であることを明かしているのである。

五 念極樂世界阿弥陀仏円満普賢大願門

この門は、極樂世界の阿弥陀仏を念ずることが同時に普賢の大願を成就するものであることを明かさんとするのである。

る。

彭際清は、「普賢行願品」の「普賢の十大願」が詳細に述べられた後の

「唯此願王不相捨離。於一切時。引導其前。一刹那中。即得往生極樂世界。」(T 10・84・c)

の文を取意して

「是經專顯毗盧境界。云何必以極樂為歸。蓋阿弥陀一名無量光而毗盧遮那此翻光明徧照。同一體故。」

と述べている。つまり『華嚴經』は、本来、毘盧舍那仏の境界を顯わすものであるが、それはまた極樂と同一であるとしている。何故かといえば、阿弥陀仏を無量光と名づけ、毘盧舍那仏を光明徧照と名づけているが如く一体であるからである。故に『華嚴經』に於いて極樂世界に往生するといっても、決して毘盧舍那仏の境界と離れたことにはならないのである。

彭際清は、更に『起信論』の最後の文の

「謂專念西方極樂世界阿弥陀仏。所修善根。回向願求生彼世界。即得往生。常見仏故。終無有退」(T 32・583・a)

を引用し、毘盧舍那仏の報土は、二乗の凡夫接引の分はなく、而も極樂は則ち九品の分張であるとしている。そして、阿弥陀仏により建立された四十八願を以て一切衆生を攝取し、時を移さず、処を易せすして任運に往生するといふので

彭際清『華嚴念仏三昧論』について(二)(中 村)

ある。また、「普賢願行品」の「到已即見阿弥陀仏。文殊師利菩薩。普賢菩薩。觀自在菩薩。弥勒菩薩等。此諸菩薩色相端嚴。功德具足。所共圍遶」(T 10・84・c)の文を引用して次の如く述べている。『華嚴經』に於いて主要な位置にある文殊・普賢・觀自在・弥勒の諸菩薩は皆阿弥陀仏の極樂世界に圍遶するといふ。つまり、妙智觀察は我心本具の淨因を明かすため文殊を首とし、大願莊処は本具の淨果を明かすため普賢を次とし、觀音弥勒は次補弥陀次補釈迦となり、二聖同会にして、淨土の正因と極果を顯わし、樂那華藏が一つになるといふのである。

如上、この門は、極樂世界の阿弥陀仏を念ずることであり結局『華嚴經』も極樂往生を以て帰趣となすとしているのである。

以上、五門の検討を加えていくことにより、もし、禪淨融合、台淨一致、教禪一致ということがいえるのであれば、彭際清のこの『論』の説はまさしく教淨一体の説といふことができるであろう。なお、五問答は次回に譲ることとする。

註、「華嚴念仏三昧論」の出典は(巳統一・2・9・1・85右上、87・左下)であり一々の箇処は略した。

(同朋大学講師)